

『ねこの郵便屋さん』

4 冊 80

4 冊 80

わたしがルニと出会ったのは、よく晴れた夏の日のことだった。

メル 367 年パールの日、中央カテゴリー市。

ディアセルの興奮からすっかり醒めたこの街は、いつもどおりの規則的なリズムを刻んでいた。

わたしは赤茶色の石畳を踏みながら、クレヴェル通りを歩いていた。

夕方のモールはとても賑やか。買い物をしている女の人、カフェで紅茶を飲んでいる学生たち、露天わきのベンチシートでおやつを食べている男の子。色んな人がいる。

「あついなあ」

わたしは手を扇のようにのはためかせて顔を煽いだ。

そりゃそうか。カテゴリーはアルバザードの中でも最南端の都市だもの。

けど、インサール地方と違ってアルバザードのあるアンシャル地方は、同じ夏でも暑さの質が違うっておじいちゃんが言ってたっけ。

ええと、たしか、インサールの多くは夏は湿っていてじめじめしているんだとか。アルバザードの夏は乾いているから天国だと聞いたことがある。

世界の人々はカテゴリーの北にある首都アルナが最も住みやすいなんていう。だけどアルナ人に言わせれば、冬が寒いのでカテゴリーのほうがいいのか。人のものはよく見えるってやつね。

確かにカテゴリーは暑くてもそんなに汗はかかないし、ムレもしない。カラっとしていて過ごしやすいことはよく分かる。

それにしたってこの暑さはないんじゃないの？

学校に行くのもおっくうになっちゃうわ。

もしかしたら、わたしの家が特別暑いのかも知れない。

ほら、カテゴリーの土地にフレアの季節な上、太陽神クレヴェルの通りに住んでいるわけだし？

ああ、そうかも知れないなあ。

私はちょっと得意げになって「ふふふ」と笑った。

クレーヴェル通りのラヴァ通りに着くと、茶色い看板のパン屋に入る。

買い物に來たわけじゃない。ここがわたしのおうち。

「ただいまぁ」

正面から入る。裏口からこっそり入れなんて言われない。そんなこと気にする人はこの国にはいないと思う。

「おや、しあちゃん、おかえり」

常連のおじちゃんに声をかけられる。銀色の Tongue をカチカチして、わたしの目を引く。

「ただいまです。いらっしゃいです」

わたしが挨拶すると、おじちゃんはにっこりしてトレイに眼を戻しながら話を続けた。

「学校の帰りかい？今日は暑いから駅からここまで大変だったろう」

「ほんと暑くて。海に行くにはいい日ですけどね。あいにく今日は学校だったんで」

「そうかい、そうかい。あ、しあちゃん、そういえばまいくつになったんだい？」

「アルソンです。こないだ 14 になりました」

「じゃあもう高校卒業だね。受験するんかい？」

「はい、中央カテゴリーを目指してます」

おじちゃんは満足げに頷いて、「がんばってね」と言ってくれた。

するとレジに立っていたお母さんがにやあつとして、「目指すだけで終わるんじゃないでしようねえ？」と言った。

「ちゃ、ちゃんと勉強するよお……」

お母さんは腰に両手をあてる。

「どうだか。ねえ、この子ったら絵ばっか描いてるんですよ？」

「ははは」

おじさんは軽快に笑う。

「も一、お母さんのいじわる」

わたしは赤くなって奥へ引っ込んだ。

うちは 1 階がパン屋なんだけど、2 階が住宅になっている。いわゆる南区に住む商人の娘ってやつね。

ひとりっこで、お母さんとお父さんとおじいちゃんがいる。4 人家族だ。

自分の部屋に上がる前に厨房に顔を出す。お父さんがパンを焼いていた。

「ただいま。お父さん、おじいちゃんは？」

わたしは大のおじいちゃん子だ。いつもおじいちゃんの周りをうろちょろしている。

お父さんのことも好きだけど、おじいちゃんはいろんなことを知ってて、面白い話をたくさんしてくれる。

「おかえり、しあ。じいさんなら裏手だよ」

「わかった。着替えたら手伝いに降りてくるね」

「ああ、頼む」

お父さんはあまり喋らない人だ。大人しい男の人なんだって。

でも、パンを焼くのはおじいちゃんと同じくらい上手。

とてとて階段を上がると、部屋で制服を脱いで作業着に着替える。

うちは小売店だけど、仕入販売じゃない。商品をその場で作って売っている。

だからパンの味と質と信用でお客さんを得ている。

小麦粉などの生産者さんと良い取引ができれば、あとは自分たちがいかに良いパンをお客さんに提供できるかの勝負なのだ。

仕入販売の肉屋に比べて、自分の腕が物を言う仕事だ。

——っておじいちゃんが言ってた。よく分からないけど。

まあ、とにかく誠心誠意いいパンを作っていこうということよね、たぶん。

アルバザードは食の安全にはとても几帳面な国なんだって。

おじいちゃんの子供のころは食品汚染や食品偽装っていう犯罪が多かったそう。

高い肉じゃないのに高いブランドの肉だと偽ったり、売れ残った肉を加工食品の原材料に回したり、賞味期限をごまかしたり、魚の産地を偽ったり、野菜に違法な農薬を使ったり、お客さんの食べ残しをほかのお客さんに使い回したりとか、それはもう酷かったそう。

わたし、その時代に生まれなくてよかったってつくづく思うよ……。

今の執政官のアルテナさまのお父さんのミロクさまが昔、そういう違反を徹底的になくしてくれたおかげで、わたしたちは安全なものが食べられるんだ。

だからミロクさまに感謝しなさいってよくお父さんたちは言ってる。

作業着に着替えた私はとんとんと階段を下りていった。

裏手に回ったが、おじいちゃんはいなかった。

あれ、厨房に戻っちゃったのかな。

わたしは勝手口を閉めようとした。

とそのとき、白い布が地面に落ちているのに気付いた。

チラっとその布に眼をやったわたしは驚いた。だってその布、動いたんだもん。

「わ」

よく見たら、それは布じゃなかった。

それは猫だった。小さな白い猫。ふわふわしてる。

「ねこちゃん。こんにちは。何してるの？」

猫はわたしに気がつくと、くるっと周って低い姿勢で地面に手足をつけ、上目遣いで私を見た。

心なしか震えている。どうやら怯えているようだ。前脚をそろえて、その前に顔を乗っけるような形で低姿勢を保っている。猫特有の、いつでもダッシュできる姿勢だ。

「別になにもしないよ」

って言っても分からないだろうから、私は近寄らないことにした。

外のごみ箱を開けて、中を確認する。よし、まだ溜まってないね。

猫はじーっとわたしを見ている。

「あの……ねこちゃん。もしかして、ごみ箱のハムがほしかったの？」

アルバザード人は食糧の放棄をしない。

おじいちゃんの若いころはコンビニが多く、24時間いつでもやっていたのだという。

棚には商品が溢れ、賞味期限を過ぎた商品はどんどん捨てられたという。

商品が豊富なほうがお客さんが買ってくれるからそうしていたそう。商品が少ないと廃棄も少ないが、品揃えが悪いということでお客さんが来ないんだって。

でもそれっておかしくない？廃棄が悪いことだってみんなが思ってるなら、変えればいいじゃない？

自分の店だけが廃棄をやめたらお客さんがつかなくなるってことが原因なら、国が一斉にどのお店にも廃棄をやめさせればいい。抜けがけする人がいなければいいのだ。

深夜にトラックを運転していた人とか、食品工場の働き手は職を失ったそうだけど、ミロクさまは別の仕事を与えて丸く収めたみたい。

これはわたしが調べた事実。おじいちゃんの受け売りじゃないよ？こないだのレポートの課題だったからね。

ただ、確かに食料の廃棄はしないけど、100個作って100個売れるわけじゃないのは事実。だから余った分は飼料や炊き出しに使われる。

でも炊き出しにさえならないものもある。床に落としちゃったハムとか、腐っちゃった野菜とかね。そんなもの飼料や炊き出しにだせっこない。

そういうのはお店の裏口にあるこういうごみ箱にまとめておく。

そしてノラ猫はそういうのを狙って生活しているそうなのだ。

多分、このねこちゃんも、そういう生活をしているのだろう。

人によってはノラ猫を処分するなんていうこともあるみたいだけど、わたしは……いやだなあ。それはかわいそう……。

だから私はごみ箱の中から、悪くなってないハムを出し、猫の傍に置いた。

猫は目を細めていぶかしそうな顔でハムを睨んだまま、しばらく固まったみたいに動かなくなった。

「いまのうちにデッサンできるかなあ……」

でも、道具持ってくるあいだに逃げちゃうだろうな。

猫は鼻を近づけると、ゆっくりハムに近付いていった。

そして確認するようにハムを嗅ぐと、はぐはぐと食べだした。

ときおりチラッと警戒するようにわたしを見ながら食べている。

「あちゅでちゅか？」

猫は一心不乱に食べている。

「キミ、おなかがすいてたんだねえ」

猫らしくというか、食べ終わったらお礼もなくさっさと去っていった。

次の日。

学校から帰っていつものように家の手伝いをしていたわたしの元に、また同じ猫がやってきた。

「お、よく来たね。昨日ので味をしめたのかな？」

すると猫は初めて「にゃー」と鳴いた。

「可愛い声で鳴くね。てことはキミは男の子かな？」

わたしはさっき床に落としちゃったサラミを手に乗せると、猫の前に差し出した。

「さあ、ねこちゃん。食べてみよ」

猫は手を出したわたしに一瞬ビクとしたが、逃げなかった。

かといって近寄るわけでもなかった。どうやら警戒しているらしい。

「根競べかなあ？」

わたしはこうなったら日が暮れてお母さんにブーブー言われるまでここで猫と競争しよ

うと決意した。

じーっと手を出すわたし。サラミとわたしを交互に見る猫。

だけど結局猫はサラミを食べず、去ってしまった。

「残念……」

わたしはパンパンと埃をはたいて、立ち上がった。

次の日も猫は来た。

「懲りないね、キミも」

「にゃー」

「あ、懲りないのはわたしもか」

「なー」

「そうそう、キミに名前をつけてみたんだ。ルニってのはどう？はじめ布かと思ったから
なんだけどね」

分かってるのか分かってないのか、ルニは鳴く。

今日のわたしの武器はハム。

もしかしたらサラミは好みじゃなかったのかもしれないし。

「おいでおいで」

手のひらに乗せるんだけど、近寄ってこない。

やっぱり距離の問題なのかなあ。

試しにハムを地面に置いてみた。わたしの近くに。

するとしばらくして寄ってきた。

わたしを警戒しながらも、ルニはハムを食べた。

「やったやった♪」

わたしはサラミを取り出すと、手に乗せた。

ルニはいぶかりながらも、私の手に鼻を近づけた。

わたしはちょっと緊張して黙っていた。

なんだか声を出したら逃げてしまいそうな気がして。

わたしは優しくルニの頭をなでる。

はじめはビクとしたんだけど、逃げることもなく、撫でているうちにゴロゴロ喉を鳴らしだした。

「ふふふ、また明日もおいで」

背中をとんとんとすると、ルニはてててと歩いて去っていった。

次の日は休みだった。

パン屋の朝は早いと思ったら大間違い。

あ、でもおじいちゃんのころは早かったそうよ。なにせ、午前にお店を開けるまでにパンが焼けてなければならぬんだから。

けど今は違う。朝になってからパンを買う人なんていない。パンは前日に買って置く。朝から出かけてパンを買って帰るような人はいないもの。

朝食用にパンを買う人がいないから、パン屋が開くのはお昼時と相場が決まっているの。だからお昼までにパンが焼けてればいいわけで、パン屋の朝は決して早くないのだ。

うちはクレーヴェル通りのラヴァ通りにあるから、お客さんは地元の東区の人が多い。

ちょっと高い、質の良いパン屋さんよね。ほら、東区の人はお金持ちだからさ。

リディア通りだったら北区からのお客さんも来てくれるんだけど、うちは北区からは遠いから、お昼休みに買いに来るサラリーマンはいない。

逆にクミール通りだったら南カテージジュ市の北区の学生やサラリーマンで賑わうんだけど、それとも異なる。

ラヴァ通りっていう中間層にあるからこそ、うちのお店は地元のお客さんが多い。

すぐそこに住んでるおじちゃんとかおばちゃんとかが買っていつてくれるから、みんな顔なじみ。

わたしのことは小さいころから知ってるし、気にかけてくれる。

5歳のときにわたしがこのあたりで遊んで迷子になったときも、すぐ近くのおじちゃんが助けてくれた。

わたしが「ラヴァ通りのパン屋のしあ」だってことは、みんな知ってるからね。

正午すぎ、わたしが裏手に出ると、ルニが来てた。

ルニに挨拶したけど、鳴きもせず、脚で顔をかいていた。

でも、わたしにはもう慣れたみたい。

作業をしていたら、裏口から勝手に中に入ってしまった。

「ルニ、入ってもいいけど、厨房周りは絶対だめよ。わたしにはお客さんの衛生を守る義務があるんだから」

「なー」

「……わかってるのかな」

案の定、1分もしないうちにお母さんの「しあーっ！」という叫びが聞こえた。

にやあ……。

厨房にまさに入らんとしていたルニを確保したわたしは、休憩をもらって自分の部屋に行った。

「あそこは入っちゃだめよ。わたしの部屋はいいけど」

ルニはわたしの腕の中でじっとしている。

そういえばルニを抱いたのは初めてだなあ。ふわふわのもこもこ。

「この作業着、変えないとな……。それにしても、キミ、ずいぶん汚れてるねえ」

しげしげとルニを見る。

「でも首輪をしているね。ノラかと思ったけど、放し飼いだっただね」

「なー」

「ちょっと待ってて。ブラシしてあげる。外を歩いてると毛並みが悪くなるよね」

ルニをブラッシングしたわたしは、ついでにルニと自分のエサを持ってきて、食べた。

食事を終えたルニはわたしの部屋をうろうろしていたけど、やがて家を出ていった。

「またね」

ルニは何も言わずに去っていった。揺れてる尻尾が面白かった。

ルニはうちが気に入ったのか、それからしばらくうちの周りにいつくようになった。

わたしは気がつくとなごはんをあげて、毛づくろいをしてあげた。

だけど1週間ほどしたら、ルニはぱったり来なくなった。

どうしたんだろうなんて心配していたら、また数日後にひょっこり現れた。

「あら、ルニじゃない。おかえり。どこ行ってたの？」

ルニは鼻を近づけて顔をすりすりしてくる。
わたしはルニの顎を3本の指で弄って、ごろごろ言わせた。
とそのとき、ふと首輪に何かがついているのに気付いた。

「なにこれ……」
それは紙だった。メモの切れ端が首輪にくくりつけられていたのだ。
「キミ、何を拾ったのよ？」
メモを外す。メモは二つ折になっていた。
そこにはこう書かれていた。

ねこ好きさんへ
毛並みをきれいにしてくれてありがとう。
ウチではこの子を「ももん」と呼んでいます。

「これ……もしかして私宛？」
ルニが鳴く。
「キミ……ももんなの？いくつも名前があるのねえ」
「なー」
「おなか空いたの？ちょっと待ってね」

わたしがドアを開けると中に入ってくる。
まるで家主のようにわたしの部屋に入っていく。猫だなあ。
わたしはハムを持ってきて、ルニにあげた。はむはむ食べる。

食べているルニを横目に、私はメモを見ていた。
もともと飼っていた人なのかなあ。放し飼いしていたのにある日毛づやが良くなってる
のを見て、よそで別の誰かに世話されてるんだなって気付いたのかも。
わたしはスケッチブックのはしっこを切り取ると、鉛筆でこう書いた。

ももんの飼い主さんへ
お手紙ありがとう。
ウチではルニって呼んでいます。ハムが好きみたいですよ。

紙を二つ折りにすると、ハムを食べおわってまったりしているルニの首輪に取り付けた。
「これで……もしかしたら届くかも……」
ルニは首輪に手紙をつけて、うちから去っていった。

次の日。学校から帰ったわたしを出迎えたのはルニだった。

お母さんははじめはブーたれていたけど、だんだん慣れてきたみたいで、家の中に入れてあげるようにしたいみたい。

もちろん厨房は締め切って入らないようにしたけど。

帰ったらルニがふつうに私のクッションの上で寝ていた。

「キミは外の埃をわたしのおしりに付けたいみたいね」

ルニの首輪に眼をやると、そこには紙がくくりつけてあった。

「あ……」

ちょっと心臓が高鳴った。

でも、もしかしたら昨日私が折った紙かも。

首輪から紙を外したわたしは口の端を上げた。感触がスケッチブックじゃない。ノートだ。

わたしは急いでメモを開いた。

ルニの飼い主さんへ

こないだクリームをあげたら、凄い勢いで食べていました。お試しあれです。

あと、私はポエン通りのラヴァ通りに住んでいます。

「わ、わ。ほんとに返事が返ってきた。すごーい」

なんだか嬉しくなって、わたしはまた紙を千切った。

わたしはクレーヴェル通りの同じ道に住んでいます。近いんですね。

アルソンの女の子です。「しあ」っていいです。

ももんの飼い主さんも、字を見た感じ、女の子ですよね？

相手の字は明らかに女の子の丸い文字で、しかも子供の字だった。お母さんの字とは違う感じ。

親近感を感じたから、勇気を出して自分のことを書いてみた。

相手が大人の男の人とかだったら、怖くて書かなかったと思う。

ルニはぶらっと部屋を出ていったが、また1時間したら戻ってきた。

「あれ？向こうに帰ったんじゃないのね」

ところがルニの首には新しい手紙が付けられていた。

「うそ。もう行ってきたの？1時間しか経ってないじゃない」

え……だってここ、ラヴァ通りよ？

中央のカルテから見て15番目の円だから、けっこう広い半径のはず。

どうやって1時間で2つも向こうのポエン通りまで行ってきたっていうの……。

まあいいか。

わたしははやる気持ちを抑えながら手紙を開いた。

しあちゃんへ。

うそーっ。私もアルソンなんだよ。

名前はメイユっていうの。よろしくね。

趣味は音楽です。しあちゃんは？

モール住まいなんだね。お店が近くていいなあ。

実はね、私、今たまたまモールにいたの。

ルニ君が歩いてるのを見つけて、手紙を書いたの。

なるほど、それで返事が早かったのね。

名前はメイユちゃんっていうのね。でも、ウチのクラスにはいないなあ。

メイユ何ちゃんだろ。ユーマみたいなよくある名前じゃないけど、かといって珍しい名前でもないしなあ。

趣味は音楽……かあ。ピアノとか弾くのかな。すてきな感じ。

「あ、そうだ」

わたしは机をごそごとと漁って、画材を取り出した。っていってもスケッチブックと鉛筆だけだけど。

ルニはクッションの上で眠っている。

疲れたみたいね。チャンス、チャンス。

わたしは鉛筆を握って腕を伸ばす。

さらさらっと 10 分くらいでルニをスケッチする。

クッションの上で丸くなって寝ている白猫のルニを描いたわたしは、メイユちゃんに返事を書いた。

メイユちゃん。

モールでももんちゃんに会ったんだ!?　すごい偶然！

ねこの郵便屋さんって便利ね。

わたしの趣味は絵です。

ももんちゃんの似顔絵を描いてみました。見てみてね。

わたしはルニの首輪に手紙と絵をつけた。絵は少し大きかったので四つ折りにした。

絵が曲がっちゃうのはちょっといやなんだけど、しょうがないよね。

それにしても絵と音楽って、この国じゃありきたりすぎる趣味だなあ。

絵を描く人間はアルバザードにはあまりに多いから。

絵描きと楽器弾きは街のどこを歩いてもいるもんね。

つまらない趣味って思われないかな。

わたしは脚をぷらぷらさせた。

まあ、こっちも音楽をつまらないなんて思わないし、向こうもきっと同じだよね。

前回の集荷は 1 時間で早かったのに、次の集荷はずいぶん遅かったようで、メイユちゃんからの返事が届いたのは翌日の夜のことだった。

トイレに行こうとして部屋を出た私はルニの声が聞こえた気がして裏手に回った。

そしたら外は雨が降っていて、ルニが軒下で「あけてにゃー」とばかりに鳴いていた。

「ほら、ほら、おはいり。さむかったね、よしよし」

わたしはタオルを取ってきて、ルニを拭く。体をふるふるさせるルニ。

「ん？　ちょっと、キミ、何をくわえているのかな？」

ルニは口に魚をくわえていた。

「これ……魚？　どっかから拾ってきたのね？　魚？　え、猫って魚食べるの？」

わたしは急に顔を真っ赤にして笑ってしまった。

あははと笑っていたらお母さんが出てきた。

「なに大声出してるの、あなた」

「お母さん、ほらみて！ルニが魚なんかくわえてるの！肉と間違えちゃったみたい」

「あらあら、しょうがない子ね。鶏肉のあまりがあるから、持ってきてあげるわ。その魚はもうダメだから、ごみ箱に捨てちゃいなさい」

「はい」

ルニは物惜しそうに魚を見ていた。

「おいで。わたしのクッションで寝ていいよ。あったかいから」

ルニは尻尾を立てて付いてくる。

首輪には手紙がくっついていて、ちょっと雨に濡れてしまったけど、ちゃんと読める。

「あ、今日の配達、ごくろーさまです」

手紙を読む。ちょっと字が掠れちゃってるけど、大丈夫。

しあちゃん。

絵、じょうずー！ ビックリしちゃった。

ルニ君の特徴がよく出てるね。

白猫を白い紙に描いても白猫の絵だって分かるのが、なんだか不思議な感じ。

絵を描く人っていつも凄いと思います。

わたしはすぐに返事を出した。

メイユちゃん。

聞いて聞いて！

今ね、ももんちゃんが魚くわえて入ってきたの！

猫って魚食べるのかなあ？

あ〜あ、写真撮ればよかった。

あ、ねえねえ、家が2つ向こうなら、そのうち会ってお話でもしない？

うちの近くにおいしいケーキ屋さんがあるの。

ルニの首輪に手紙を付ける。

「では、明日の配送よろしくおねがいしまーす」

ルニを撫でると、尻尾をぶらーんと振って返事をした。
「でも今日は一緒に寝ようね、ルニ」

雨の夜が去った朝はすっかり晴れていた。
海の近くの空なんて、こんなもんだ。
——ってというのはおじいちゃんの口癖なわけで。

今日はおやすみ。
天気がいい。気分も最高。
ルニはごはんを食べたら、とことこ部屋を出ていった。

「お母さ〜ん」
わたしは厨房に顔を出す。
「今日は海に行ってこようと思うの」
「ああ、いつもの？うん、いってらっしゃい。気を付けてね」
「はい」

するとお母さんは思い出したように付け加えた。
「あ、宿題はやったのよね？」
「や……りますよ？」

休日は週2日。この国ではみんなそう。
学生はいらない授業の多い日を見繕って7日のうち2日間休みを取る。
今年は工学とか物理の多いイルヴァと、進路上進級テストに出ない音楽とかの多いパルトをやすみにしている。

部屋に戻って画材を集め、カバンに入れて外へ出る。
「あついなあ」とか言いながら、最寄りの駐輪場へ向かう。公共自転車がたくさん停めてある。
左手のアンセをかざし、サイズの合う女の子用のピンクの自転車に乗って。カルザス通りへ向かう。

途中、地下道に入る近くで人力車が急に幅寄せしてきて、びっくりした。

慌てて「きゃあ」って言っちゃった。怖かったよ……。

でも、なぜか乗っていた大人な女の人が丁寧に謝ってくれた。感じのいい、アルバザード人らしい感じの人だ。

やっぱり人力車に乗るような奥様は違うなあ。東区から来たのかな。

カルザス線のラヴァ駅付近の駐輪場に自転車を止め、アンセをかざして自転車を国に返却する。

駅に入り、正面アーチを通過し、ホームへと降りていく。

ラヴァ駅は急行が止まらないから、緑の電車で南カテージュへ向かう。

南カテージュのコノーテ線のクミール駅に入ったところで、電車を乗り換える。

赤の電車に乗る。急行だから別料金が取られるけど、ここのカルザス線のクミール駅まで各駅に行っていたら、ユノを使う前にノアが疲れちゃうからね。

地下鉄はほとんど音も立てず、静かに進んでいく。

あっという間にクミール駅に着くと、鞆を抱えて階段を上がる。

地上へ出ると急に強烈な日差しを受ける。

日焼け止めクリームを塗り直すと、外へ出た。

麦藁帽子を深くかぶる。

今日は白のワンピース。お気に入りの服。気分、最高。

わたしの目的は水泳じゃないの。

貝殻を集めにきたのでもないのよ。

絵を描きにきたの。

海岸に訪れた人たちの似顔絵を描く。

これがわたしの休日の過ごし方。週に1回はこうして過ごすことにしている。

歩いて海岸へ向かう。

行先は籠女海岸。

時間はお昼前。

アルバザードは休日となる曜日が決まってない。みんな思い思いの曜日に休みを取るから、どの場所も一斉に混雑することがないし、逆にガラガラでさびしいということもない。常に心地よく空いていて、かつ、どこもさびれていない。

「よっこいしょ」

波打ち際からちょっと離れたところにシートを敷いて座る。

「風が気持ちいいなあ」

画板と電子ペーパーとペンを取り出す。

画板を抱えて三角座りでぼーっと海を描く。

おじいちゃん曰く、これがアルバザードの絵描きだ。

アルバザード人は「似顔絵描きます。一枚〇ソルトです」みたいな看板を立てない。

そんな商魂たくましいことは恥だとおじいちゃんがいつも言ってる。

ただ、ぼーっと周りの景色を描いている。

あと、お客さん用の折り畳み椅子を置いておく。この椅子があれば似顔絵師だってことが分かるから。

こうしないと、ただ景色を描いているのに似顔絵描いてって話しかけられて困っちゃうからね。

アルバザード人は芸術が大好き。

アルナには世界一のランスケルン美術館があるくらいだし、アルバザード人に並べるとしたらエルトア人くらいのものじゃないかな。

メテ人もルティア人もアルバザード人ほど芸術を大事にしない。

こうして休日に絵を描いていると、たいていお客さんが寄ってくる。

多くのお客さんは友達と来ているか家族と来ているか、それとも一人で来ている。

一人のお客さんは暇をしていることが多い。

アルバザード人は人懐っこくて気立てのいい人が多いから、似顔絵師を捕まえて雑談をしてくるのだ。

一人のお客さんは暇つぶしに、絵描きに話かける。

世間話を楽しみながら、絵を描いてもらう。

絵描きも会話を楽しみながら趣味をして、休日を過ごすというわけだ。

大体話しかけてくるのは同じ年代の人が多い。

みんな雑談をしにくるから、話題の合う世代がいいってことみたい。

ぼーっと海を描いていたら、長袖の女の子が声をかけてきた。

「こんにちは。いいですか？」

案の定、わたしと同じくらいの年の子。

黒い長い髪、おとなしそうな子。セミロングのわたしとは対照的ってほどでもないけど、動と静の違いはあるかも。

「はい、どうぞどうぞ」

にこりとして椅子を勧めると、女の子はすっと座った。

「何か飲みます？」

ポットにお湯を入れ、お客さんに提供するのがホスト側の礼儀。

水分がないと話しづらいもんね、とくに夏は。

お茶のティーパックも持っているから、お湯以外にもいろいろ提供できる。

「あ、それじゃあお湯を。ごはん前なので」

「はい」

お湯を差し出す。

「整った顔ですね。髪もすごく綺麗。フルミネアみたいって言われませんか？」

「そんな」

女の子は赤くなって手をぶるぶるさせる。

「紙がいいですか？それとも電子ペーパー？」

「あ……ええと、じゃあデータで」

「はあい」

私は電子画板を取り出す。

「あの。そういえば、電子ペーパーと紙って、どっちをほしがる人が多いんですか」

「そうですね。やっぱり電子ペーパーですかね。紙は帰りの持ち運びも困るし、その後の保管も困るから」

「ああ、なるほど」

女の子は頷く。

「絵は長いんですか？」

「物心がついたころには描いていましたね」

「へえ。じゃあ、そのころ電子画板も買ってもらったんですか？」

「いえ、買ってもらってはないんですけど、うち、おじいちゃんが絵を描くから、おじいちゃんのを使わせてもらってました。自分のは……中学に上がったときかな、お祝いで」

「それでも十分早いんですよね。なんだか、すごい……」

「ふふ」

「でも、今は電子画板があるから楽ですよ。おじいちゃんのころは大変だったみたいで」

「へえ？」

「ええとね」わたしはいったん手を離す「こういう四角い板があってね」

「うん」

「板には何も書いてないの。そこにペンで絵を書き込むのよ。っていっても実際にペンで板を彫るんじゃないくて、ペンで板に描く振りをするのよ」

「何も書いてない板に？」

「そう。すると板に書き込んだ内容がパソコンの画面に表示されるの」

「??」

「想像しづらいよね。板と画面の座標が対応してて、板に書き込む振りをすると代わりに画面に描いたものが表示されるの」

「つまり……手は板にあるのに、目は画面を見てるの？よくそんなので絵が描けたね、昔の人は」

「だよ。さすがにそれは不便だったらしく、パソコンの画面に直接書き込むタイプっていうのができたみたいで」

「ええ……？でも、光る画面を見続けるなんて、体に悪そう」

「そうなんですよ～。だから電子画板サマサマだよ」

こくこくと頷く女の子。

わたしはお湯を飲んで言う。

「今日は泳ぎにきたんじゃないの？」

「うん、海を見に来ただけだから」

「あ、もしかしてアルナ人とか？」

「ううん。地元よ」

「あ、私と同じだね。じゃあ魚は珍しくない人か」

「うん。あ、アルナ人ってやっぱり魚を珍しがるのかな？」

「たぶんね。まあ、カテゴリーだってあんまり魚は取れないけど」

「そうなの？」

「世界の海の中じゃテージュは痩せてるほうよ。海藻の少ない青い海だし、魚も少ないの。海はきれいだから泳ぐのには向いてるんだけど、食べるのには向いてないわね」

「詳しいのね」

「とかいって、実はおじいちゃんの受け売り」

わたしははにかんだ。

女の子はお湯を飲んで一息ついてから、言葉を紡ぐ。

「そういえば、年って同じくらいかなあ。そう思って安心して話しかけたんだけど」

「ぼいよね。わたし、アルソンよ。あなたは？」

「あ、私も私も。やっぱりね。高校生って感じ、したもん」

「鞆とか？」

「うん。ほら、大学生になったら鞆って誰かしらプレゼントしてくれるじゃない？その鞆、高校生のときのつぼいもん。私のにも似てるよ」

「画板とか入るから助かるよ、この鞆。あ、それで、わたしは中央カテゴリー高校なんだけど、あなたは？」

「私は東カテゴリーよ」

「そっかあ」

となると隣の市ね。うちからだと電車で30分から1時間ってとこかしら。近いような遠いような。

パン屋の宣伝しても、意味ないだろうなあ。ルニ便も圏外ね。ルニ10匹に駅伝してもらわないとだわ。

——なんて絵面を想像したら、思わずにやけてしまった。

「休みのたびに絵を描いてるの？」

「週1くらいかな。あなたは連休な人？」

アルバザードでは休みは授業のコマ割りを見ながら週2日自分の好きな曜日に取れるから、連休を取ろうと思えば簡単に取れる。

「うん、今年は受験に専念したかったし」

なるほど、連休があれば自習も根詰めてできるわけか。わたしにはない発想だなあ。

「受験ねえ。わたしも頑張らないとだわ」

「ってことは中央大ねらい？」

「ま……一応」

「絵で食べていくの？」

「それは無理よお。学問と芸術は違うから」

アルバザード人は芸術が好きだが、芸術だけでは食べていけない。第一芸術家本人が芸術だけで食べようとするのを嫌う。

学問は人類の発展に必要なだが、芸術はそうではない。あれは趣味や余暇の範囲内で行うのが適切とされている。

「うちのおじいちゃんがよく言ってるわ。人間は何かしら社会を維持するために労力を提供しなければならないってね。お店をやってる人は食糧を売ったり製造したり、オフィス

ワーカーは書類の処理をしたり。何かしら社会を維持していく努力が義務ってね」

「じゃあ学生の義務は勉強かな？」

「たぶんね。未来の社会を維持するための投資なわけだから。でも、絵描きは違うわ。絵描きがいなくても私たちは食べていけるじゃない？でも小麦を作る人がいなくなったらダメじゃない？ユーマの一族もそれまでよ」

「そしたらカルテ神に祈るしかないねえ」

のんびりと女の子が呟く。食料の神様に祈って助けてもらうことを考えているようだ。

「うん。ただ、ミロクさまの祈りでも、これだけの人口分は確保できないと思うのよ」

「そうかなあ？」

女の子はあくまで懐疑的だ。

「そうよ。実際そうだったじゃない」

「そういえば……歴史で習った気がする」

「だから芸術だけでってわけにはいかないよね、悲しいけど」

わたしはわざとらしくハイズした。

「あ、でもさ」

女の子が思い出したように言う。

「例えば美術館の職員になれば、芸術がそのまま仕事になるんじゃないの？」

わたしはこくこく頷いた。

「そうなのよ。だから本当はわたし、大きくなったらアルナに行きたいの」

「えっ？カテゴリーを出るの？移住するって珍しいね」

「カテゴリーってほら、中途半端に都会じゃない？」

「海があって暖かくて私は好きよ。まあ、夏は暑いけど」

「アルナは世界一の都市だし、ランスケルン美術館もあるしさ」

「ああ、ランスケルンの職員になりたいのね？」

「まーね」わたしは伸びをして一瞬手を休める「でも、実際は無理かも」

「どうして？」と首をかしげる女の子。

「うち、南区にあるの」

「ああ」女の子は分かったように頷いた「家業を継がないってことね」

「わたしだけアルナに行くわけにはいかないしさ。おじいちゃんたちにアルナでお店をさせるわけにもいかないし」

「まあ、家業があれば将来安定してるってところはいいいよね」

「そうね。おかげでわたしはこうして休みにのんきに絵を描いてられるんだし」

まったり話をしていたら、いつの間にか1時間以上経ってしまった。

「はい、できたよ」

わたしは着色を終えると、電子画板を女の子に見せた。

「わあ、きれーっ！これ、私でいいの？」

へんな言い方する子だなあ。わたしは苦笑しながら「そっくりだと思うよ」と答えた。

「ありがとう！」

「じゃ、転送するね」

わたしが画板を向けると、女の子は左手の腕時計型アンセを伸ばしてきた。

データを転送すると、女の子はファイルを開いてしばらく見ていた。

「これ、友達に見せるわ。150 ソルト、受け取ってくれる？」

「ありがとう」

わたしは左手を差し出した。互いの手首を交差させると、女の子のアンセから設定額の150 ソルトがわたしのアンセに送金された。

アルバザードでは似顔絵の相場はこの程度と決まっている。こちらから「いくらいくらです」というのははしたないから、お客さんに任せている。

お客さんは必ず「〇ソルト、受け取ってくれる？」という言い方をする。この言い方がアルバザード人の美德だっておじいちゃんが言ってた。

たまに外国人が来るけど、外国人は素直に聞いてくるので、こちらも素直に相場を伝える。それはそれでいい。

「そういえば」ふとおじいちゃんの話思い出した「カコとかアルディアとか、昔ってアンセがなかったじゃない？大変だったみたいよ」

「へえ？どんなふうに？」

「お金は紙か金属でできていてね、それをみんな持ち歩いていたのよ」

「ん？紙がお金？それ、簡単に盗られそうじゃない？」

「そうそう。道を歩いている人を脅して盗ったりってこともあったみたいよ」

「そういえば聞いたことあるなあ、そういう話。今からじゃ考えられないね。送金は本人の承認がないとできないし」

「もし不良が脅迫して送金させても、送金記録はアンセを通じて政府で管理されるから、あとで被害者が警察にいけば、それまでなのよね」

「じゃ、私いくね。楽しかったわ。これからお昼？」

「うん、もうそんな時間ね。そこの屋台で何か買うわ」

「じゃあ良いこと教えてあげる」

女の子は風で舞った砂をスカートから払うと、200 メルフィくらい離れたミリア像を指さした。ミリア像は小高い、岬のところにある。

ミリア＝ルティアは籠女海岸の語源になった人で、アシェットの英雄リディア＝ルティアの妹だ。美人でおしとやかな上に慈悲深い人だったと伝えられている。

ミリア像はカテゴリーの観光スポットだから、籠女海岸には人が溢れている。

「ミリア像がどうかしたの？」

「あの向こうって行ったことある？」

「そういえば……ないわね」

「みんな籠女海岸とミリア像にしか興味がないじゃない？でも実は、あの向こうにもう一個岬があるの。そこ、人がいなくて景色も最高なのよ。サンセットなんて感動ものだから」

「へえ！そんな穴場があったんだ？」

「私の秘密の場所なの。でも、あなたには教えてあげる。行ってみて。きっと気に入るわ」

「あなたは？」

「今日はもう帰るの。午後は受験勉強したいから」

「そっか……。じゃあ、気を付けて」

女の子は去っていった。

わたしは荷物を片付けると、屋台に行ってお昼を買った。

その足でミリア像の向こうへ行ってみた。わたしより背の高い草木を切り開いた砂利道があった。静かで誰もいない。風も穏やかで、心なしか涼しい。とてもいい気分だ。

「この向こう、ちゃんと道が続いてるのかな……？」

アンセを開き、衛星から地図を読み込む。

「大丈夫……そうね。まあ、道も開けているし、大丈夫か。なによりあの子もふつうに行ってるみたいだし」

草木が終わると白い砂浜になった。

「わあ……」

そのまま進むと岬があった。ここだ。

岬に立つと、右手にミリア像が見える。人が集まっているが、みなミリア像ばかり見ている。

「なるほど、これは気付かないわけよね。穴場だわ」

わたしはシートを広げ、海を見る。

「いい眺め……」

わたしは満足げにお昼を食べはじめた。

「そういえば、ルニはどうしてるかなあ。今日はどっちに来てるんだろ。メイユちゃんのところかな。メイユちゃん、今度会おうって話になんて返事してくるかな」

ルニ、わたしがいなかったらハムもらえなくて、またどこかでおさかな盗んだりして。
「あ、そうだ。ここの写真撮ってメイユちゃんに送ってあげよう」
アンセをかざし、写真を撮った。

「静かだし、音楽でも聞こうかな」

シールを耳に貼りつける。爪くらいの大きさのシールだ。わたしの肌の色に合わせてある。

アンセの音楽再生機能をオンにすると、無線で音楽データがシールに飛んでくる。

シールは骨伝導で音波をわたしの頭に伝える。耳は塞がっていないから、周りの音はちゃんと聞こえて安全だ。

それにしてもこのシールって不思議だわ。こんな薄くてどうして音が聞こえるんだろう。

おじいちゃんのころはちっちゃいスピーカーみたいな機械を直接耳に入れていたとかなんとか……。スピーカーを耳に入れるって、どれだけ原始的なんだろうと思うけど。

しばらく休むと、わたしはまた海岸に戻って絵を2,3枚描いた。

それが終わった頃にはもう6時になっていた。

サンセットが美しいって言ってたけど、この季節は見れないだろうなあ。8時くらいまで明るいから。アルナだと9時まで明るいらしいけど、ここは南だから8時ごろまでだ。

夜間外出禁止令も夏場の明るいうちは黙殺されるけど、だからって夕日が沈んでから中央カテゴリーに帰ったんじゃ、真っ暗になっちゃうほうが先。

さっきの子は地元の人じゃないのに、どうやってサンセットを見たんだろう。冬場の、4時くらいに日没するころに来たのかな。

荷物を片付けると、電車で家に帰った。

今日は楽しかったな。

家に帰ると、ルニがクッションで寝ていた。

「すっかり家主だね、キミは」

「なー」

ルニの首輪には手紙が付けられていた。メイユちゃんだ。

会って遊ぶ話、OKしてくれたかな。

ちょっとときどきしながら、メモを開いた。

しあちゃん。

ルニ君ってお魚食べるんだ？面白いね。

ケーキ屋さん、ぜひ紹介してね。

私の休みはイルヴァとパルトよ。

しあちゃんのお休みは？

あ、メイユちゃん、イルヴァ休みなんだ。よかった、遊びに行けるわ。
わたしはさっそく返事を書いた。

メイユちゃん。

わたしはイルヴァとパルトなの。

今日はまだ無理だから、来週のイルヴァに待ち合わせして遊ぼうよ。

あ、そのケーキ屋さんは、クレーヴェル通りのレレゾナ通りなんだけど。

それと、メイユちゃんも今日はお休みだったのね。

残念。知ってれば会えたのに。今日は何してたの？

「さて、ではルニ君、配達よろしくお願いします」

ルニは脚で耳をかく。

「ん？お代は夕ごはんって言いたいよね。いいよ、ちょっと待ってて」

ルニにご飯をあげて、わたしは居間で家族と夕飯を食べた。

食べて部屋に戻ったら、ルニ便はもう出払っていた。

夜、日記を書き終えて寝ようかというころ、わたしはルニの鳴き声が聞こえた気がして、裏口に回った。

するとそこにはルニがいた。

外はまた雨らしい。しとしと降っている。

雨を嫌ったルニが避難を求めてやってきたようだ。

「おかえり、早かったね。ねこ便は雨天のほうが早く届くって、初めて知ったよ」

苦笑しながらルニを入れる。

「メイユちゃんのところには行ったの？」

ルニはまるで答えるように頭を突き出してくる。

首輪には新しい手紙。

ルニを拭いてあげたわたしは、手紙を開いた。

しあちゃん。

うん、あそぼう！

じゃあ今度のイルヴァの正午に、レレゾナ駅のアーチのところで待ち合わせでいい？

あ、それと、ケーキ屋さんのあと、籠女海岸に行かない？

実は今日行ってきたんだ。

「うそっ！？私もだよーっ！えー、じゃあ、あの人ごみの中にメイユちゃんがいたんだ」
驚きながら、続きを読む。

ミリア像の近くに眺めの良い穴場があるのよ。

そこ、紹介してあげる。

「……ん？それってさっきの穴場のこと？メイユちゃんも知ってたんだ」

あれ……？

なんか……違和感があるな。

あそこってそんなに有名なんだろうか。

あ、紹介で思い出したけど、海岸に感じのいい絵描きの女の子がいるのよ。

今日、似顔絵を描いてもらったの。

今度その子も紹介してあげる。しあちゃんも描いてもらいなよ。

「え……？」

思わず眉をひそめる。

そうだ。待ち合わせするなら、私の顔を知らないとだよね。

さっき描いてもらった似顔絵をアップしておくから、アクセスしてみてね。

そして手紙の最後にはアドレスが書いてあった。

「まさか……」

わたしは恐る恐るアドレスにアンセをかざし、ファイルを開いた。

「——！」

ルニはわたしの気も知らず、クッションの上ですやすや眠っている。

わたしははじめは驚いて安心してたんだけど、なんだかものすごい運命を感じちゃって、
最後にはにやついて笑っていた。

「え……でもなんで？あの子、東カテゴリー高って言ってたよね」

ハッとするわたし。

「そうか……メイユちゃん、東区住まいでラヴァ通りだから、中央に行くのも東に行くのも距離的に変わらないんだ」

東カテゴリー高と聞いてすっかり彼女の家も隣の市だと思っていたが、そうではなかったのだ。

しばらく静かな驚きの余韻に浸っていたわたしだったけど、やがて返事を書きだした。

メイユちゃん

ねえ、運命って信じる？ わたしは信じるようになったよ。

ねこの郵便屋さんが来たのも、運命だったんじゃないかって思うよ。

なんの話かって？

あのね、わたしもその絵描きさん、知ってるの。

描いてもらったこともあるのよ。

——自画像を。

クッションの上で寝ているルニを起こさないように、静かに手紙を首輪に付けた。

ルニは薄眼を開けてわたしを見た。

ためしに「なー？」と言ってみたら、「なー」と返事をした。

「おつかれさま。また明日も配達、よろしくおねがいします」

わたしは微笑んで、ルニを優しく撫でた。

「ねこの郵便屋さん。お代はごはんと暖かいクッションで。

配達はやれば1時間。遅くて翌日。

あなたもいかが？……なーんて」